語文と教育　第二十七号　抜刷　平成二十五年八月三十日　鳴門教育大学国語教育学会

「名刺」という小さなディスクール

――森鷗外「青年」に於ける「利他的個人主義」との接点をめぐって

黒田　俊太郎

「名刺」という小さなディスクール

――森鷗外「青年」に於ける「利他的個人主義」との接点をめぐって

黒田　俊太郎

吉見俊哉はかつて、日本のカルチュラル・スタディーズの源流ともされる前田愛の都市記号論の試みを引き合いに出し、「文化の研究に於いてテクストの「読み」という意味論的な過程が決定的な重要性を持つ事が明らかにされていった」としながらも、それらの試みが「「読み」を呈示する事にとどまり、そうした「読み」を生産している社会的な場の問題は視界の外に置いていた」として、日本に於けるカルチュラル・スタディーズ受容の挫折を指摘した。[1] 吉見の言う「社会的な場」とは、「いったい誰が、どこからテクストを読むのか、また人々がそのようなテクストの読み方をしてしまうのはどのような条件のなかでのことなのか」といった事に関わる「読みの場」に他ならないが、そうした「場」を「問題」化する事とは、いかなる実践なのだろうか。

本稿は、森鷗外の小説「青年」（『昴』明治四三［一九一〇］・三～明治四四［一九一一］・八、全一四回）の「読み」が生産された場所を歴史化する一つの方途を提示する事を目的とする。この歴史化とは、ある時代の〈知の体系〉により規範が実定性を措定される瞬間を、歴史的なものとして脱構築する事だが、ここでは徹底的に〈物〉に関わる問題系への分析が展開されるだろう。具体的には、「青年」に繰り返し登場する「名刺」という〈物〉、この「名刺」は後に見てゆくように、物語の視点人物である小泉純一にコミュニケーションの場を提供する一方、小さなディスクールとして構造化される事で、物語に推進力を与えるという機能を持つが、ここでは「名刺」の同時代コンテクストに於ける制度としての側面に注目し、そうする事でしか浮上してこない、「青年」の「読み」を提示してみたい。

分析の手順は、第一に、「青年」に於いて「名刺」が占める構造的な位置を確認する。第二に、明治四三年前後に於いて「名刺」という〈物〉がいかに消費され、いかなる機能を有していたかという事を、『万朝報』紙上で行われた「競争名刺投票」というイヴェントを見てゆく事で確認する。第三に、「名刺」が制度化されたシステムとして自律して行く歴史的経緯を問題化する。第四に、「青年」で「名刺」が登場するそれぞれの場面に於ける「名刺」の機能を確認し、最終的にこの小説に於ける「利他的個人主義」の問題と「名刺」が接する地点について考察したい。

Ⅰ　「青年」と「名刺」

「青年」を〈失敗作〉とする評言は、高橋義孝が「内的構造の破綻」[2]を指摘して以来枚挙に暇がない。磯貝英夫もまた、「思想的閲歴」「肉体的閲歴」「文学方向の切り変え」という「三つの話柄」を連絡する論理の欠落を指摘している。[3]こうした「青年」の破綻を指摘する評言の多くは、磯貝自身もそうであったように、最終回「二四」の末尾に掲げられた作者鷗外の〈未完〉であるとの附言を根拠としている。

鷗外云。小説「青年」は一応これで終とする。書かうと企てた事の一小部分しかまだ書かず、物語の上の日数が六七十日になつたに過ぎない。霜が降り始める頃の事を発端に書いてから、やつと雪もろくに降らない冬の時候まで漕ぎ附けたのである。それだけの事を書いてゐるうちにいつの間にか二年立つた。兎に角一応これで終とする。

仮に、鷗外が「青年」という作品を失敗作だと自覚し、右の文章がそれに関する自己言及だったとしても、その事は「青年」というテクストの〈失敗〉を意味しない。故に従来の定式化した批評の枠組に対しては、野村幸一郎が「「青年」は芸術作品としての完成度からその価値が測られる単純な小説ではない。日露戦争後の時代状況を巧みに作品世界へ招き入れる事で、この作品は小泉純一という一主人公が時代と対話する言説空間として現れている」[4]としたように、「青年」研究は、同時代の文化的・思想的背景の調査と、その事による読みの広がりの可能性の模索へと視点を移動させてきたと言えるだろう。[5]

ところで、「青年」では実際、複数の「話柄」が混在する事となるが、そうした複層化の要因となる人々とのコミュケーションの場で繰り返されるのが、「名刺」の〈交換〉という行動なのである。「青年」の主たる中心は、青年小泉純一と、彼の同郷の友人である瀬戸、作家の大石路花、純一が東京での拠点とした家に遊びに来るお雪という銀行頭取の娘、先輩友人の大村荘之助、坂井れい子という婦人、そして、おちゃらという芸者にあり、物語は、純一とこれらの人々との交渉により進む。そして、それらの交渉の発端は、お雪との出会いを例外として、すべて「名刺」が〈交換〉される事によって（あるいは一方的に手渡される事によって。しかし、単純な贈与がありえない以上、そこには何らかの〈交換〉が行われているのだが）引き起こされるのであり、「名刺」〈交換〉という行為は、語り手により純一が物語世界内に於ける空間的位相を越境する瞬間を意味するサインとして提示されているといってもよい（それと同時に、注意深い読者の側でも「名刺」の登場を、純一の物語世界内に於ける別の位相への越境の場面として意識させられる事となるようなコードが、語り手と聞き手との間に成立していくだろう）。例えば、自然主義作家になろうと上京したばかりの純一が、自然主義作家大石路花を訪い初めて対面するという、「文学方向の切り変え」という「話柄」に関わる重要な越境の場面で、純一は路花に「名刺」を差し出している。また純一が自然主義作家となる事を放棄する契機となる平田拊石のイブセン論

を聴講した、瀬戸が「折々行く青年倶楽部のやうなもの」という社交の場で、純一は大村と、やはり「名刺」を〈交換〉する。そしてこの大村との出会いが、「思想的閲歴」「肉体的閲歴」といった「話柄」の複層化の大きな因子にもなっていくとすれば、「名刺」という〈物〉はテクスト内に於いて看過し得ない構造的位置を占めるといえるだろう。また、これらの場面以外でも、坂井婦人・おちゃらといった女性との出会いの際に「名刺」〈交換〉が行われているが、これらの場面に於ける「名刺」をめぐる行動様式の意味を理解するためには、「名刺」にまつわる慣習を同時代言説から抽出しておく必要があるだろう。

Ⅱ　『万朝報』の「競争名刺投票」

明治三九年五月五日、『万朝報』は次のような奇妙なイヴェントを行う事を発表した。それは、「面白き懸賞新案」との見出しの付された、「競争名刺投票」というイヴェントであった。当時の『万朝報』は、紅野謙介が指摘したように、明治三〇年一月一七日に予告された「懸賞小説」の募集に代表されるような「読者参加のプログラムを本格的に組み入れる事」で、「他紙との差異化を目指す」試みがなされていたが[6]、そのような「読者参加のプログラム」の一環として、「競争名刺投票」は実施される事となるのである。

この「競争名刺投票」については、同年五月八日までの四日間、大々的に一面トップを割いて事細かにその懸賞企画への投票方法が報道される事となる。同年五月九日以降は、読者への投票に際しての心得として、「名刺投票新読者募集懸賞」と題された簡潔な文章が、これもまた一面トップに掲載され続ける事になる。この「名刺投票新読者募集懸賞」は、同年八月一日を最後に、何の前触れや終結宣言もなく中絶してしまうまで、何度かの中断を挿みながらも三ヶ月間にわたってほぼ毎日掲載された。

名刺投票新読者募集懸賞

万朝報は西洋諸新聞の例に習ひ、新読者募集懸賞を初めました。

万朝報の新読者を募た人は、自分の名刺へ好な番号と、其の新読者の住所姓名とを記し、且其の新読者の月極前金を添へて、当社又は売捌店へお届け下さい

新読者が千人に満る迄に最も多く募た人五名へ貯蓄債券五枚を分ちます

其上に籤引きして名刺の番号と籤の番号と合た人十名へ貯蓄債券十枚を分ちます

但し此懸賞に加はるは万朝報の常読者（即ち月極購読者）に限ります、成る可く早く常読者と為り、成る可く多く新読者を募り、成る可く多く懸賞を取て下さい

これによると、『万朝報』が行った「競争名刺投票」というイヴェントは、複数の西洋の新聞社によって既に行われた事のあるイヴェントの〈複製＝レプリカ〉であった事がわかる。とはいうものの、このイヴェントは、連日の大々的な報道、そし

てそれが「面白き」「簡単な」「高等」といった修飾語とともに連鎖的に語られる事で、劇的に、新奇な出来事として演出されたという意味に於いて、〈擬似イヴェント〉の様相を呈する事となる。そして、そもそもこのイヴェントの目的が、明治三七年という、このイヴェントの二年前に公布された「貯蓄債券法」にもとづいて創設された、日本勧業銀行が発行した公債である「貯蓄債券（額面五円）」というニューモデルの〈財〉を既存の読者に提供する事と引き換えに、多数の「新読者」を獲得する事であった事も明らかにされるのである。(7)

同年五月一四日、「競争名刺投票」の「第一回結果報告」がやはり一面トップで行われたが、「新読者募集競争は当社の予期に二十倍する速度を以て昨日既に一千点に達したり」として、反響の大きさが強調されている。この『万朝報』の見解が事実だとすれば、およそ一〇日間で一〇〇〇枚を超える「名刺」が投票された事になるが、たった一〇日間で一〇〇〇人以上の人間が『万朝報』を購読する「新読者」となったと考えると、確かに驚異的な反響があったといえるだろう。驚くべき事に、「第二回結果報告」がその四日後の五月一八日に行われ、その後も連日のように「点数当選者」（「新読者が千人に満る迄に最も多く募た人五名」）と「番号当選者」（「籤引きして名刺の番号と籤の番号と合た人十名」）とが交互に発表されていく。この交互に行われたほぼ連日の発表は、同年七月一〇日までに計一六回（「点数当選者」と「番号当選者」の発表は同日には行われなかったため、三二回の発表があった事になるが）にわたったが、この一六回目（三二回目）の発表を最後にぱたりとその発表をやめてしまうのである。そして、さきほども述べたように、八月一日まで続いた一面トップの「名刺投票新読者募集懸賞」広告も、新聞紙面上から以後消滅する事になる。

このように、大々的に報道されたイヴェントの終結に際し何の宣言もなされず、また七月一〇日まで連日のように続いていた当選者発表が突如として終結するという、つまりは投票者が突如としていなくなるという異例の事態への疑問の念は残るが、五月一四日の第一回の当選者発表から、七月一〇日の第一六回の当選者発表までのおよそ二ヶ月間に、『万朝報』は少なくとも一六〇〇〇人の「新読者」を獲得したという事になるであろう。

この事が事実であるならば、『万朝報』の「競争名刺投票」というイヴェントは当初の「予期」以上の成功を収めたといえるが、そうした出来事の事実如何以上に、このイヴェントが実施される過程に於いて、メディアとその既存の読者＝投票者との間で、「債券」という〈財〉と〈多数の「新読者」〉とが〈交換〉された事の意味は小さくない。このような場に於いて、読者（既存、新規を問わず）は〈交換〉の対象として物象化されているが、そのような〈交換〉がメディアとその読者との間に成立するためには、両者の間には何らかの心性の、けれども人格的交渉が剥落した〈了解〉が不可欠なのだが、この両者の間の心性の〈了解〉を根本的に可能にしているのは、他ならぬ「名刺」という〈物〉なのである。

このイヴェントに於いて「名刺」は、そもそも投票者の正体

を保証する〈物〉として両者の間で〈了解〉されなければならない。「競争名刺投票」の「説明」として同年五月六日に「一四」もの規約が掲げられたが、そのうちの三つ目に「名刺」の形態そのものについて次のような条項が記されていた。

三、名刺は何の様でも宜しい又活字で印刷したものに限りません、読み易く自分の住所氏名を記して有れば可いのです

「名刺」には投票者の「住所氏名」が明記されなければならなかった。「氏名」という固有名が、デリダを引くまでもなく、常に〈反復可能〉なものにすぎず、その名前を冠した人間の固有性を保証するものではないにも拘らず、投票者を正確に表象する〈物〉としての特権が、「名刺」には付与され、そのような「名刺」に付された特権への〈了解〉が、両者の間に存在している。そして、そのような〈了解〉を基盤とする事によって、「債券」という〈財〉と物象化された〈多数の「新読者」〉とが、〈交換〉の場に引き出される事になるのである。もはやそのような場に於いて、メディアの言説はその報道内容を〈読まれる〉事を目的とする事を放棄し、読者の側も〈読む〉事への意志を忘却させられている。そこに残されたのは、イヴェントの昂揚感と、〈物〉が行き交う光景だけであった。

Ⅲ 「名刺」という制度化されたシステム

『万朝報』が「競争名刺投票」というイヴェントを実施した、というよりもむしろ、そのようなイヴェントを実施しえたという事実から（一方で、ハードウェアとしてのメディア装置の問題系も見逃す事はできないが）、明治三九年の時点で、「名刺」が制度として何らかのシステムを構築していたという事ができるだろう。もちろん、『万朝報』が行った「競争名刺投票」というイヴェントに於ける「名刺」の役割が、これから見て行く事になるであろう、一般的な「名刺」の使用方法とは異なる特殊なケースであった事はいうまでもないが、重要なのは、イヴェントの実施を可能にした、「名刺」という制度化されたシステム及び〈物〉としての普及という事である。

この『万朝報』のイヴェント実施の同年に出版された『社会新辞典』[8]の「名刺」の項には次のようにある。

めいし　名刺　名刺は、その人の品位を示すに足るものなれば、なるべく世間普通のものを用ふべし。破るるが如き紙を切りて、粗略にかきたるもの、事に大形なるもの、色の黒きもの、垢つきたるもの色彩あるもの、皺あるもの、印刷せる文字あるを消したるもの等は、決して用ふべからず。人の家を訪ひて、その人不在なるときは、上部の一隅を折りおくべし。新年の礼には、恭賀新年等の文字を記入すべし。喪用には、四周に黒線を用ふべし。

この記述が示す事は、「世間普通」の「名刺」に用いられるべき紙の材質・色・大きさ、文字の書き方、つまりは用いるべき活字の種類といった「名刺」の形態に関わる事柄が、事細かに規定されていたという事であり、そのような規範を遵守する

事がそのまま、その「名刺」を用いる人間の人格的な「品位を示す」（＝表象する）事になっているという事である。いわば、「名刺」が人物Ａから人物Ｂへと手渡されるとき（あるいはまた、人物Ｂから人物Ａへも手渡されるとき）、つまりは「名刺」が人物間で消費されるとき、「名刺」は人物の「品位」を指し示す記号としての機能を担わせられるようになっているのだ。また、新年の挨拶や葬儀といった文字通り儀礼的な場に於いては（名刺〈交換〉という行為それ自体が〈儀礼的〉だが）、「名刺」に非日常的な装飾を加える事で日常との差異化が図られるような、文化的コードの構築が達成されている。

このような「名刺」の形態や使用法に関わるシステムの構築はしかし、明治三九年ごろまでに徐々に達成されたものではなかった。雑誌『小国民』[9]の創刊や『明治事物起源』[10]の執筆で知られる編集者・日本学者石井研堂による「名刺の使用」（『明治文化研究　新旧時代』第四巻・第四号、昭和三・四）には、次のような記述がある。

今日のやうに、名刺を出して、自分の姓名を先方に通ずる事は、古来の風俗であったが、今日ほど多く用ひるに至つたのは、矢張西俗の伝播である。

亜米利加応接録（写本二冊もの）に、安政元年正月、米国使節との応接の際、彼より名札を出したので、わが代表者林大学頭等も、役名姓名を記した名札を、彼に与へ、それから談判に及んだ記事がある、これが、今体の名刺使用法の嚆矢であらう。

「名刺」は江戸時代より、訪問先が不在であった際に置いてくるヴィジティング・カードとして存在しおり、それには、和紙片が用いられ、姓名も書かれていたという。これは中国で古くから行われていた習慣に由来するというが、この石井の記述から明らかになるのは、『社会新辞典』に見られるような、明治末年までに構築され、普及した「名刺」の形態や使用法に関わるシステムは、いわばそうした「古来の風俗」とは異質な、「西俗の伝播」によるという事であり、明治維新とともに急激に立ち上げられたという事が言えるだろう。もちろん、「西俗」がそのまま移入されたわけではなく、独自の使用法も生成された。

『社会新辞典』にも記されていた新年の挨拶に「名刺」を用いる風習がそれで、早くも明治一八年一月四日の『東京日日新聞』には、「或る省の某局」に於いて実施された「新年名刺〈交換〉会」の記事が見られる。同様の記事は、明治二二年一月一七日の『大阪毎日新聞』、明治三七年一月六日の『東京朝日新聞』、明治四〇年一月一日の『日本新聞』、明治四三年一月二日の『読売新聞』などに散見でき、それらの記事を年代順に追っていくと、新年の挨拶に「名刺」を用いるという風習が「或る省の某局」という局所的な行事から、〈上流階級〉全体に裾野を広げていった軌跡が辿れる。例えば、明治三七年一月六日の『東京朝日新聞』の「新年の鳩山博士」という記事で、同年一月三日に催された「牛込区（筆者、現新宿区）の名刺〈交換〉会」に、小石川区音羽（現文京区）在住の法学博士鳩山和夫が酒などの差し入れ持参で参加しようとしたところ、牛込区在住ではない

との理由で伯爵、男爵連に追い返されたという報道がされた。これには、鳩山が「候補一件で諸君にお近付になりたくて参つた」のだという選挙戦の裏事情が、笑い話の落ちとしてあるのだが、この出来事が示唆するのは、「新年名刺〈交換〉会」という新年の祝祭的行事が、実は〈上流階級〉の一定の公共性を有したホモソーシャルなサロン（＝社交的集会）であったという事であり、いわばそうした「新年名刺〈交換〉会」という社交的集会の場に参入できるかいなかという事が、〈上流階級〉への参入それ自体を左右する出来事であったという事だ。逆に言えば、「新年名刺〈交換〉会」という祝祭の場に於いては、「名刺」〈交換〉という〈儀礼的〉行動が、男性にとっての〈上流階級〉への参入を意味するという制度化されたシステムが確立されており、ほとんど無意識的な慣習として構造化されているといえよう。

また、選挙の「候補」であった鳩山の「名刺」〈交換〉という行為は、選挙運動の一環に他ならなかったが、先にも挙げた明治二二年一月一七日の『大阪毎日新聞』には、「選挙新戦法」として「県会議員選挙上の競争甚しく、市中各家へ名刺を配達する事大に流行し」た事が報道され、「活版所は名刺の刷立に多忙を極め」ていた事を伝えているが、この選挙候補者が「名刺」を利用して知名度を上げる「選挙新戦法」は、以後定着する事となり、明治三〇年代後半には批判の的となるのである。この事については、『図説　明治事物起源』[11]に詳しいが、『団団珍聞』明治三五年六月七日号には、「◎名刺の運動「名士でなくて名刺の運動とは驚いた」」（図説一参照）とあり、また同紙の同年一二月二〇日号は、「◎名士の広告演説」（図説二参照）として、選挙運動に於ける「名士」の苛烈なまでの「名刺」攻勢を皮肉っている。

図説一

図説二

むろん、『団団珍聞』紙上の言説が「名士」に向けて行った批判というものが、選挙候補者による政策議論を度外視した「名刺」による知名度偏重の風潮に向けられたものである限り、それは的を射た発言だった。しかし、ここで見落としてはならない事は、「新年名刺〈交換〉会」と同様に、選挙運動を実施している候補者、あるいは「名刺」を受け取るであろう有権者、そして恐らくは間違いなく『団団珍聞』の記者、それらはすべて男性であったという事だ。「名刺」を有権者にばら撒くという制度化されていった行為、そしてそれに対する批判的言説、それらは選挙権も参政権も有さない女性、そして選挙権を獲得しえない男性を、[12]抽象的に、と同時に構造的に排除しているのであり、いわばジェンダー化された慣習の構造化に、これまで見てきた制度化されたシステムや言説の価値体系は大きく関与していたといえるだろう。

このように、「名刺」の形態や使用法、あるいは〈交換〉の場といった事に関する制度化されたシステムの構築と、階級化、ジェンダー化された慣習の構造化という事との関わりを見た上で、最後にふれておきたいのは、「名刺」が消費されるべき商品性を有した〈物〉としていかに普及してたかについてである。

名刺製造業は殆ど東京の専業と云ってよい位だ現在東京には約三十軒の製造業者があるが、これに対して大阪には七、八軒位しかない、しかも東京の業者は規模が大きく製品も全国的に名前の通った優秀なものを製造している元来名刺と云う品物は四角四面に鯱子張った格好の紙に自分の姓名や身分職業或は位階勲等までをいかめしく刷込もので一体がいかつい代物である、だから明治の初年頃名刺と云うものを使い始めたのは当時の官員様あたりだったらしい、従って名刺の需要は先ず東京に始まったものでその製造も亦東京が先駆となり、東京製品が全国的に行きわたるようになったものである（中略）名刺製造業も登り坂時代は明治の中葉から震災前位まででそれ以後は需要も大体限度に達し同業も増えて来てあまり儲かる仕事ではなくなった

右の言説は、昭和一〇年三月二二日付け『時事新報』に、「飽和点に達した名刺の製造」と題して掲載された記事である。この昭和一〇年という地点から過去を俯瞰する言説が示すのは、第一に、「西俗の伝播」による「名刺」を製造し、普及させるという事が、「四角四面に鯱子張った格好の紙に自分の姓名や身分職業或は位階勲等までをいかめしく刷込」という作業、いわば印刷という複製技術に代表されるような技術の面での「西俗」の普及と不可分であったという事である（無論この「名刺」の普及という事が、階級化された慣習とは無縁ではありえないのだが）。第二に、「名刺の需要」（＝「名刺」の消費）及びその製品が、「製造も亦東京が先駆となり、東京製品が全国的に行きわたるようになった」という事から、少なくとも「名刺」という〈物〉の流通ルートが、「東京」を基点として同心円的に全国へと広がるネットワークを形成していったという事である。第三に、「名刺製造業」が、明治四〇年代前半に完了したとされる日本経済に於ける産業革命をはさんだ「明治の中葉から震

災前位まで」は独占状態にあって「儲かる仕事」であったが、「震災」以降「需要も大体限度に達し」、「あまり儲か」らなくなったという事だ。

『象徴〈交換〉と死』[13]に於いてジャン・ボードリヤールは、産業革命以後を、一つのモデルの再生産の時代であると把握し、生産に象徴〈交換〉と流通とがとって代わった事を指摘した。もちろん、この指摘は欧米の産業革命とそれ以後に於ける〈物〉の分析を通して得られたものであるだけに、それをそのまま日本の産業革命と「名刺」という〈物〉の分析に援用できるわけではない。けれども、「名刺」という〈物〉が、印刷された常にオリジナルなき〈複製＝再生産〉（＝ reproduction）の産物である事を前提とした〈物〉であるとき、[14]あるいは、手放す（もはやそれは、〈交換〉である。なぜなら、精神的であれ、象徴的であれ、〈交換〉を伴わない単純な贈与という事はありえないのだから）事によって、その記号としての象徴的な価値が生ずる〈物〉であるとき、〈生産〉業としての「名刺製造業」は産業革命と期を同じくして「あまり儲か」らなくなったのではなく、そうした〈複製＝再生産〉の時代の中で安定したのだといえるだろう。そのような産業の安定、いわば「名刺」の普及という事は、「名刺」という〈物〉の制度化されたシステムの構築、それに扇動される慣習の構造化といった出来事の安定・普及と期を同じくするのであり、つまりは「名刺」を人物間で流通させるといった〈文化的〉な行動が、特定の階級・職業・ジェンダーに属する人々の構成する共同体に於いて十分に実践されるようになった時期に重なるといえるだろう。

そして、「青年」という小説が発表されたのは、まさにそのような日本経済に於ける産業革命が完了したといわれる時期に符合していた。以下の各節では、複数の慣習を構造化することで、主語と述語を欠落させた言語表現であるにも拘らず、「名刺」が「青年」というテクストの中でディスクールとして機能する様相を見ていきたい。

Ⅳ　「名刺」の「顕示的」消費

「名刺」を小説中に描く事は、早くは樋口一葉「にごりえ」（『文芸倶楽部』明治二八・九）などで行われているが、頻繁に登場して来るのはやはり明治四〇年前後からである。なかでも夏目漱石は、「吾輩は猫である」「坊ちゃん」「趣味の遺伝」「草枕」「野分」「三四郎」[15]「満韓ところどころ」「それから」「門」「行人」「彼岸過迄」「こころ」「道草」「硝子戸の中」「明暗」などで「名刺」を効果的に用いた。鷗外もまた「ヰタ・セクスアリス」「二人の友」「魚玄機」などに「名刺」を書き込んでいるが、「青年」は本稿第一節ですでに確認したように、「名刺」が「話柄」の複層化を惹起する因子として重要な構造的位置を占めているという意味で他のテクストとは一線を画しているといえるだろう。

「青年」の冒頭は、地方の「Y県」から東京に上京してきたばかりの小泉純一が、「東京方眼図」を片手に「上野行きの電車」に乗る場面で始まる。それは、「小説家志願」の純一が、自然

主義作家の大石路花に面会しようと、大石の住む「袖浦館」に向かう場面だが、ここは歴史的出来事の闖入を許す事により物語内容の時間が判明する場面でもある。つまり、『東京方眼図』という実際に森鷗外が立案し、明治四二年八月に東京の春陽堂が発行した新奇な地図が物語に書き込まれる事で、物語内容の時間は少なくとも『東京方眼図』の発行以後という事になるのだ。また、「十一月二十七日に有楽座でイブセンの John Gabriel Borkmann が興行せられた」という記述が後に出てくるが、明治四二年一一月二七日と二八日の二回、有楽座に於いて森鷗外訳によるイブセンの「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」が実際に試演されている。ちなみに、「青年」の『昴』誌上での連載は明治四三年三月から始まっていたが、純一が「芝日陰町の宿屋」を出て「袖浦館」に向かったという「十月二十何日かの午前八時」という時間はそのおよそ半年前の、〈明治四十二年一月二十何日かの午前八時〉であると特定可能である。さらに、このように物語内容の時間を特定したばあい、「爺いさんは四年前に、倅が戦争に行ってゐる留守に」に於ける「戦争」が、日露戦争（明治三七―三八年）という歴史的出来事であったという事が理解されるのである。

純一の物語世界内に於ける空間的位相の越境の場面を準備する「名刺」〈交換〉が初めて行われるのは、（一）に於ける瀬戸との偶然の再会の場面であった。純一は大石の住む「袖浦館」にたどり着いたが、大石がいまだ就寝中との事で上野周辺の散歩を余儀なくされる。この散歩中に瀬戸と出会い、再び別れるその間際に瀬戸が「名刺」を出して自らの「下宿の番地を鉛筆で書いて渡し」てくれるのである。純一の方からは「名刺」は手渡されないが、これは二人が既知の仲であり、瀬戸が「名刺」を渡したのも、純一に「下宿の番地」を伝えるためであったからだ。ここで瀬戸は、「僕はここで失敬するが、道は分かるかね」と述べているが、この言表は純一のその後の東京での行動を規定していく道先案内人としての瀬戸の役割を暗示している。つまり、大村との邂逅や平田拊石のイブセン論の聴講を準備した、瀬戸が「折々行く青年倶楽部のやうなもの」や、おちゃらと出会う事となる「亀清楼である同県人の忘年会」といった[16]、いずれも上京したての純一には縁のない、あるいは縁を絶とうとしていた社交の場に強引に引き出していくのが、瀬戸という人物なのである。

純一が大村と初めて邂逅し、「名刺」を〈交換〉する場面を見てみよう。

「いえ。さうではありません。まだ田舎から出たばかりで、なんにも遣つていないのです」

純一はかう云つて、名刺を学生にわたした。学生は、「名刺があつたか知らん」とつぶやきながら隠しを探つて、小さい名刺を出して純一にくれた。大村荘之助とある。（二八）

ここで注目したいのは、大村が純一に手渡した「名刺」の形態が、「小さい」と形容されている点である。この「小さい」という「名刺」の大きさに関する形容は、「名刺」の一般的な大きさとの比較による相対的な表現だろうが、『社会新辞典』の

「名刺」の項を再度参照すると、やはり「世間普通」の大きさというものが存在し、「事に大形なるもの」は「決して用ふべからず」として忌み嫌われている。その一方で、次に引用する、明治三六年に発行された大和灰殻編『西洋土産ハイカラー珍談』付録「当世ハイカラー修行」[17]の記述は、「小さ」く「肩書」の記されていない「名刺」が「ハイカラー」なものであった事を示している。

述べて爰に来ると、ハイカラーが交際上の、最必要品なる名刺に就いて一言せねばならなくなつて来た。

処が、この名刺には別に流行、捨たりが無いから、人様々に思ひくの物を拵えて居たが、これまでの如く、金縁台紙へ、コテくと肩書をつけるのは面白く無い。これは寧ろすまし込むで、小形の無地紙へ、六号の明朝か何かで名前だけ刷らせ、其他事くしい肩書は、先刻御承知の筈だがと、知らを切る方妙策である。

そして、羅馬字のものは、別に製し置いて、日本字のものと、一葉で二様に使はうなどの了見は、ゆめく起す可らざるものだ。

「ハイカラー」という呼称が大村を表象するものとして適切であったかはさておき、「ハイカラー」である事の必要条件としての「小さい」「名刺」は所持していた。その事以前に、「ハイカラー」にとって「名刺」が「交際上の、最必要品」であったという事実から、「名刺には別に流行、捨たりが無い」という言葉とは裏腹に、「名刺」を携帯する事自体が〈流行〉に乗り遅れないための必須要件だったのである。〈流行〉という事を、新奇性・一過性・社会的影響力を備えた生活・行動様式で、普及という事の前段階に位置する現象であるとするならば、「名刺」が制度化されたシステムとしてではなく、〈物〉として普及したと呼びうるであろう「震災」以降より前の明治四三年前後のこの時期を、まさに「名刺」が帝都「東京」を中心として〈流行〉した時期だったといえる。このようなコンテクストに物語を再び置き直す時、純一や瀬戸が名前だけで「肩書」の記述のない「名刺」を所持していた事や、純一が「名刺」を常に携帯し、事あるごとに率先して「名刺」を手渡す事の意味は小さくない。

「まだ田舎から出たばかりで、なんにも遣つていないのです」と断りながら、大村に「名刺」を差し出す純一は、坂井れい子という、例の「イブセンの John Gabriel Borkmann」が興行された有楽座で出会った、「奥さん」との会話の最中にも、やはり「私は国から出て参つたばかりで」と断った上で、「姓名丈の小さく書いてある」「名刺」を手渡すのである。この様な行動のシークエンスが生まれた背景には、或いは次の様な上京直後の体験が関係しているかもしれない。

「あなたお国からいらっしつた方のやうぢやあないわ。」

純一は笑ひながら顔を赤くした。そして顔の赤くなるのを意識して、ひどく忌々しがつた。それに出し抜けに、美中に刺ありともいふべき批評の詞を浴せ掛けるとは、怪しからん事だと思つた。（四）

初対面のお雪に対し「詞が見付からなかった」純一は、むろ

ん地方出身者である事など告げていない段階でそれを見抜かれてしまうと、「美中に刺あり」と動揺と怒りを隠せない。これ以後、純一は、自分が「田舎者」である事を相手の先手を打つかのように表明し、次の瞬間にはその事実を自ら打ち消すかのように、〈流行〉の産物としての「名刺」を手渡すようになるのだ。「名刺」は自身を「田舎者」と差異化する免罪符的装置として「顕示的」[18]に消費されるのである。また、次のような純一の内面を語る語り手の発言には、「詞」を巡る純一の葛藤の様子が伺える。

「大石さんにお目に掛りたいのだが」

田舎から出て来た純一は、小説で読み覚えた東京詞を使ふのである。丁度不慣な外国語を使ふやうに、一語一語考えて見て口に出すのである。そして、此返事の無難に出来たのが、心中で嬉しかった。（中略）薩摩絣の袷に小倉袴を穿いて、同じ絣の袷羽織を着てゐる。被物は柔かい茶褐の帽子で足には紺足袋に薩摩下駄を引つ掛けてゐる。当前の書生の風俗ではあるが、何から何まで新しい。これで昨夜始めて新橋に着いた田舎者とは誰にも見えない。（一）

語り手は「これで昨夜始めて新橋に着いた田舎者とは誰にも見えない」とする事で純一を「田舎者」と措定し、かつ服装によって「田舎者」であると見られる事への防御線を張る純一の工作を読み手に暴露する。またここで語り手は同じ目的で、純一が「東京詞」を「無難に出来たのが、心中で嬉しかった」と安堵する心理を抽出してもいるだろう。純一が「東京詞」を獲得したのは、「国語」教科書や新聞などのメディア言説からではなく「小説」からだったが、「言文一致体」とされる小説言語が実際に運用しうる事を純一はこの時初めて確認したのだ。小森陽一は『〈ゆらぎ〉の日本文学』[19]に於いて、「言文一致体」とされる小説言語は「明治の支配階級がすむ、東京の山の手というきわめて限定された地域、そうであるがゆえに特権的な領域で使用されている局所的な言語」に他ならないと指摘したが、「人の遭遇といふものは、紹介状や何ぞで得られるものではない。紹介状や何ぞで得られたやうな遭遇は、別に或物が土台を造つてゐたのである」として同郷の有力者に下駄を履かせて貰う事を拒否した純一が（唯一度紹介状を介して遭遇したのが大石だったのは偶然ではないだろう）、自らを〈文壇〉や大村や坂井夫人らとの社交の場という、「特権的な領域」に流通させていくために、「東京詞」は「名刺」と同様に「顕示的」に運用されたといえるだろう。ただし、「名刺」の機能は、純一を「田舎者」から分割し卓越化する事に留まるものではなかった。

V　流通の物語、〈物語〉の流通

「名刺」を流通させるという儀礼的行為が繰り返される事で、「青年」という物語では「話柄」の複層化が招来される。その機構については後述するが、その一方で、テクストに於いては、「名刺」の流通に随伴する形で、〈物語〉の流通が行われていくのである。

奥さんは姓名丈の小さく書いてある純一の名刺を一寸読

んで見て、帯の間から繻珍の紙入を出して、それへしまつて、自分の名刺を代りにくれながら、「あなた、お国は」と云つた。

「Y県です。」

「おや、それでは亡くなつた主人と御同国でございますのね。東京へお出になつたばかりだといふのに、ちつともお国詞が出ませんぢやございませんか。」

「いいえ。折々出ます。」

奥さんの名刺には坂井れい子と書いてあつた。純一はそれを見ると、すぐ「坂井恒先生の奥さんで入らつしやつたのですね」と云つて、丁寧に辞儀をした。

「宅を御存じでございましたの。」

「いいえ。お名前丈承知してゐましたのです。」(九)

坂井婦人(奥さん)との「名刺」〈交換〉の場面で、純一は「坂井れい子」と書かれた「名刺」を受け取って即座に「坂井恒先生の奥さん」であると判断している。この迅速な判断を純一に可能にしているのは、坂井婦人の「亡くなつた主人」と純一の出身地が「同国」であるという直前の会話から得られた情報と、自分と「同国」の法律学者坂井恒という、純一にとって既知の固有名に関する情報、そして、「名刺」に書かれた「坂井れい子」という文字情報、これら三つの情報の有機的結合である。

重要なのは、〈主語―述語〉というディスクールを本来的に欠いた文字列に過ぎないはずの、いわば意味生成性を保有しないはずの「名刺」に印刷された固有名が、純一にとって既知の情報=記憶と連結されているという事態である。こうした事態は、「坂井れい子」=「坂井恒先生の奥さん」という判断を遙かに超える事態へと発展する事となる。つまり、坂井婦人に纏わるスキャンダラスな「噂」=〈物語〉を純一に想起させ、純一はもはやその〈物語〉抜きには坂井婦人を解釈しえない。いわば、「名刺」に印刷された固有名は、意味生成性を保有していないどころか、肥大したシニフィエ=〈物語〉を時として内包している。ゆえに坂井婦人が「純一の名刺を一寸読ん」だように、「名刺」は常に解読されるべき小さなディスクールとして現前しているのだ。

このような意味での〈物語〉は、なにも「噂」といった既知の情報=記憶がなければ生成されないものではない。「名刺」の形態及び使用(法)に於ける差異は、その「名刺」を用いる人物表象を左右する〈物語〉の差異となって顕在化する。

それから純一は、床の間の隅に置いてある小蓋を引き出して、袂から金入れやら時計やらを、無造作に攫み出して、投げ入れた。その中に小さい名刺が一枚交つていた。貰つた儘で、好くも見ずに袂に入れた名刺である。一寸拾つて見れば、「栄屋おちやら」と厭な手で書いたのが、石版摺にしてある。

厭な手だと思ふと同時に、純一はいかに人のおもちやになる職業の女だとは云つても、厭な名を附けたものだと思つた。文字に書いたのを見たので、さう思つたのである。

名刺といふ形見を持つてゐながら、おちやらの表情や声音が余りはっきり純一の心に浮んでは来ない。着物の色どりとか着こなしとかの外には、どうした、かう云つたといふ、粗大な事実の記憶ばかりが残つてゐるのである。

併し此名刺は純一の為めに、引き裂いて棄てたり、反古籠に入れたりする程、無意義な物ではなかった。少くも即時にさうする程、無意義な物ではなかった。そんなら一人で行つて、おちやらを呼んで見ようと思ふかと云ふに、さういふ問題は少くも目前の問題としては生じてゐない。只棄ててしまふには忍びなかつた。一体名刺に何の意義があるだらう。純一はそれをはつきりとは考へなかつた。或は彼が自ら愛する心に一縷のencensを焚いて遣つた女の記念ではなかつただらうか。純一はそれをはつきりとは考へなかつた。

純一は名刺を青い鳥のペエジの間に挟んだ。そして着物を着換へずに、床の中に潜り込んだ。（十八）

瀬戸に強引に連れられていった「亀清楼である同県人の忘年会」で、純一はおちゃらと出会い、「こん度は一人で入らっしゃいな」と言いながら「小さい名刺入れ」から出された「名刺」を受け取っていた。右の場面は、それから家にたどり着いた純一が、ふとその「名刺」に気づく場面である。

おちゃらの「名刺」は、当時の「名刺」製造法に於いて正式な方法の一つである「石版摺」だったが、純一はそれが「厭な手」で書かれてあったとする。「石版摺」が、特殊な転写紙に手書きしたものを、石版石に転写し、それを原版として印刷したものであるから、転写紙へ手書きする段階での出来映えが、「名刺」のそれにそのまま反映される。「厭な」という言葉の真意は測りかねるが、字義通りに取れば〈不愉快な〉という事であり、「手」とはここでは「文字」という意味である。つまり、おちゃらの「名刺」は〈不愉快な文字〉で書かれていたというのだ。

その〈不愉快な文字〉を誰が書いたのかは不明であるし、その事に関する語り手の発言や純一の推測も記されてはいないが、手書きの「石版摺」であるという事、そしてその「手」が「厭な」事、それらの事を純一が観察し、注目したという事実からは、「名刺」という紙に刻印された「手」という〈身体性〉への、純一の不快感が滲み出ているといえる。さらに、その「名刺」という紙に刻印された〈身体性〉への不快感というものが、実は「人のおもちやになる職業の女」である、おちゃらの〈身体性〉に向けられたものである事が、「厭な手だと思ふと同時に、純一はいかに人のおもちやになる職業の女だとは云つても、厭な名を附けたものだと思つた。文字に書いたのを見たので、さう思つたのである」という記述から判明するのである。その一方で、「名刺」は純一におちゃらに関する「記憶」を蘇らせるが、何故かおちゃらの「表情や声音」といった〈身体〉に関する具体的「記憶」は「はつきり」しない。だがその事とは反比例するかのように、「着物の色どりとか着こなし」といった〈物〉に関する「記憶ばかりが残つてゐる」のだ。この事は、純一が

おちゃらという存在を、「着物」に代表される〈物〉の記憶と、「名刺」という〈物〉に刻印された〈身体性〉という、二重に〈物〉に依存した構成体として捕捉していた事を意味し、その事は、純一がおちやらを、職業上の呼称を使用し流通する複製品、或いは客体として立ち上げられた第二の〈身体〉として徹底的に物象化していたという側面を明るみに出す。こうした純一の態度は、純一に不快感を与えるにも拘らず、おちゃらの「名刺」が捨てられる事なく〈所有〉される事となったように、いつでも「一人で行つて、おちやらを呼」ぶ事が出来るという可能性が純一の元に残された事と、相似形をなすだろう。

むろんそうした事への自覚は純一には乏しかったものの、「栄屋おちやら」という六つの文字の羅列に対しては、「一体名刺に何の意義があるだらう」と、読解すべき〈物語〉として意識されてもいただろう。ただし、語り手が「純一はそれをはつきりとは考へなかつた」と二回繰り返したように、「名刺」がマアテルリンクの「青い鳥のペエジの間に挟」まれてしまう事で、〈物語〉の「意義」を解読する作業は保留されるのである。

Ⅵ　純一の〈罪悪感〉の行方

そうしたおちゃらの「名刺」の「意義」については、端無くも純一の部屋にやって来た大村が、「名刺」の挟まった「青い鳥の脚本」を手に取りそうになる事を契機に、輪郭が露になる。「おちゃらの名刺の挟んであるのを見られるのが、心苦しい」（二十）と感じた純一は、咄嗟に「青い鳥の脚本」を取り上げ、自ら「青い鳥」に関する議論を強引に開始する。この議論は、一連の大村との「利他的個人主義」に纏わる対話に発展し、かつその最終段階に当るという意味で結果的に重要な場面になるが、純一は議論の間、「始終おちゃらの名刺が気になっている」（二十）。そして長尺の議論が終了し、大村が「便所に立」つと、純一は次のような行動に出るのである。

忙わしい手は、紙切小刀で切つた、ざら附いた、出入りのあるペエジを翻した。そして捜し出された小さい名刺は、引き裂かれるところであつたが、堅靭なる紙が抗抵したので、揉みくちゃにせられて袂に入れられた。

純一は証拠を湮滅させた犯罪者の感じる満足のような満足を感じた。（二十一）

言うまでもなく、「小さい名刺」は何らかの〈罪悪感〉の表徴であり、その〈罪悪感〉こそ、純一が解読する事を保留し自身にも明確には意識されていなかった「意義」に輪郭を与える。純一が意識の上下の如何を問わず抱えていた〈罪悪感〉の内実を問うには、実はそれと密接不可分の関係にある「利他的個人主義」の概念について整理しておく必要がある。周知のように、「青年」に於ける「利他的個人主義」に関する論考は、「青年」論の数だけあるといっても過言ではないが、それらの多くは、先に言及した「三つの話柄」（磯貝）の内の「思想的閲歴」の問題として独立に議論されるか、「思想的閲歴」が「文学方向の切り変え」に与えた影響関係について議論されてきた。ただ

し、鷗外訳「シュレンテルのボルクマン評」（『国民新聞』明治四二・七・一～四）の一節（「主人公の利己心にはそれと均勢を保つ丈の自分を犠牲にする胆力が欠けてゐる」）を引きながら、「こうした内容を持つ芝居を見た純一が、坂井夫人との閲歴を経て、利己・利他の問題を考え、大村との議論を再び展開するというのは、だから非常に計算された筋のはこびと言えるのではないだろうか[20]」とした須田喜代次の指摘もある。むろん純一がシュレンテルのボルクマン評を読んだことを実証しえない以上、その連続性を主張する事は厳密には困難だが、純一単独の位相に於ける「利他的個人主義」（「思想的閲歴」）の問題は、実は「男子の貞操といふ問題」（十）、即ち「肉体的閲歴」と関わる側面が極めて大きいのではないか。

純一と大村との出会いの場となる「青年倶楽部のやうなもの」（六）で、二人は平田拊石のイブセン論を聴講する。拊石はイブセンの主張する個人主義に「世間的自己」「出世間的自己」の両面がある事を指摘し、前者を「習慣の縛を脱して、個人を個人として生活させようとする」、後者を「習慣の朽ちたる索を引きちぎつて棄て（中略）強い翼に風を切つて、高く遠く飛ばうとする」と説明する。そして、因襲としての「倫理」「宗教」を破壊する（「世間的自己」）だけでなく、「Autonomie」という言辞に表象される、新たな「倫理」「宗教」を自ら「構成」していくこと（「出世間的自己」）こそが、イブセンの求めた「新しい人」だというのだ。このイブセン論聴講後、純一は「自分も相応に因襲や前極めを破壊している」として、自然主義の実行者と自己規定しながら、それが「世間的自己」に過ぎない事に思い当たる。同時に、拊石に「髣髴として認められた」「何物か」が、自然主義作家の大石には認められないと言う素朴な感想は、純一の文学観の転換の萌芽となるだろう。大村とのその後の議論に於いて、個人主義の二つの側面は「消極的新人」「積極的新人」と換言されるが、純一の「積極的新人」への指向性は、坂井婦人との「閲歴」を経由する事で、純一自身によって「利己主義」の問題へと接続されていく。

「積極的」という事の内実を模索する純一が先ず実践したのは、「内面からの衝動、本能の策励」（十）に従い、「男子の貞操」を「保つ」事を善とする「因襲」打破へと突き進む事だった。「男子の貞操」を「保つ」事が「身を保つとか自ら重んずる」という「利己主義」でしかないと断ずる純一は、「利己主義の上から、或る損失を招いた」という不確かな自覚があるにも拘らず、「後悔してゐない」と自分に言い聞かせる。しかし坂井婦人との「閲歴」直後、「己には真の生活は出来ないのであろうか」との不安を表明し、「なぜ真の生活を求めようとしないか。なぜ猛烈な恋愛を求めようとしないか」との自責の念を吐露した事が示すように、当初は〈積極的／消極的〉＝〈肉体的閲歴／恋愛〉＝〈反利己主義／利己主義〉という定式に基づき、「恋愛」に理想を抱きつつもその「利己的」＝「消極的」側面への反発心（反利己主義）から「肉体的閲歴」へと踏み出したのである。しかし、予想に反しそのことから「何の積極的な感じも」得られないとすれば、純一は「積極的」の概念を修正しなけれ

ばならなかった。

実際純一はこの出来事の直後大村に何の脈絡もなく「男子の貞操といふ問題はどういうものでしょう」（十）と尋ね、自説を披瀝している。これに対し大村は、「貞操」を「保つ」という事を、「生活の衝動を抑制しているのだから、egoistique（注、利己的）よりはaltrustique（注、利他的）の方になる」（十一）と主張する。この瞬間、オセロの盤上の石が一度に反転する様に、純一の構築した定式は総て顛倒し、「自分の思想が凡て利己的」である事に気付かされるのである。これにより、相手を思いやって自身の「内面からの衝動、本能の策励」を「積極的」に「犠牲」にする「利他的」行為として「純潔な交」＝「恋愛」は浮上してくる。即ち、大村により齎された発想の転換は、「恋愛」という行為に理論的正当性を附与し、純一を隘路から救抜する道筋を与えた。だが、大村の「そこで自己を犠牲にして、恋愛を得ようと思つたといふのですか」との問いに対して、純一は「稍やわざとらしい笑」を浮かべて「恋愛を成就するのが、積極的新人の面目だとも思ひません（中略）自己の徳目を数へて見て、貞操なんといふことを持ち出したのです」と、〈貞操問題〉を議論の核などではないと嘯くのである。実はそれほど多くない純一の内面描写の殆ど全てが〈恋愛／肉体的閲歴〉を巡る葛藤である事を踏まえれば、「閲歴」後の大村との議論には常にそうしたテーマが底流していたといえるだろう。

「名刺を青い鳥のペエジの間に挟」（十八）むと直ちに「床の中に潜り込んだ」純一は、一つの「夢」を見る。押し寄せる「海嘯」から身を守ろうと木に登ると、そこには既に一人の「知らぬ女」がおり、「相触れんとするまでに迫まり近づ」くと、女は忽ちおちゃらになり、続いて坂井婦人になる。純一は「僅かに二人の間に存してゐる距離を縮めようと思ふ慾望」に「悩まされてゐるうちに、女の顔はいつかお雪さんになつてゐる」。その「一刹那」に、純一は「半醒覚」状態になるが、純一の「体には慾望の火が燃えてい」るというのだ。ここには、おちゃらや坂井婦人に向けられていた「欲望」＝「内面からの衝動、本能の策励」が、お雪さんに差し向けられる事への禁忌の感情が駆動している。ただしここで重要なのは、おちゃらや坂井婦人に対する「欲望」に純一が「悩まされている」事の方で、それは自身の「欲望」に従順である事が「利己的」行為なのだとの自覚が齎した〈悩み〉に他ならなかったのであり、純一の〈悩み〉の位相が、「恋愛」の「利己的」側面から「本能の策励」の「利己的」側面へと大きく変質した事を意味するだろう。

「青い鳥」に挟まれた「小さい名刺」は、当然の事ながら「本能の策励」の「利己的」側面の表徴であり、それが純一の抱いた〈罪悪感〉の内実に他ならない。「夢」を経由することで、純一の意識の上に「名刺」は明確な「意義」もって立ち現れるが、大村が他ならぬ「青い鳥」を起点として、「利己主義の側はニイチェの悪い一面が代表している。例の権威を求める意志だ。人を倒して自分が大きくなるという思想だ」（二十）と「利己主義」を難じながら「利他的個人主義」についての思考を深化させている正にその時[21]、「名刺」という自らの「利己的」側

面を暴露する「証拠を湮滅」する企ては進行しようとしていたのである。

これ迄見て来た様に、「青年」というテクストに於いて、「利他的個人主義」（「思想的閲歴」）の問題と「肉体的閲歴」の問題とは、分裂しているどころか、純一単独の位相に於いてはむしろ同一の問題として認識されていたといえる。ただし、大村により牽引される議論に於いては、それが中心的テーマであると悟られないよう、純一により意識的に潜在化される事により、「肉体的閲歴」の問題は純一の心内語や日記という形でしか読者に語られず、メインプロット（純一にとってどちらがメインだったかは問題だが）との連携が希薄な印象を与えるのも事実だ。

だが、大村には見つかってはならない「名刺」が「青い鳥」に挟まれているという構図は、そうした「青年」全体の構造と見事に符合するとともに、それが「袂に入れられ」破棄されなかった事は、純一がいまだ「積極的新人」＝「利他的個人主義」の実践者たり得ていない事を示唆する。事実、坂井婦人の年末年始を一人で箱根で過ごすから「お暇ならいらっしゃいましな」（十五）との誘いに純一は応じるが、それに対する語り手の反応は「庇護をも文飾をも加える余地が無」い「動物的の策励」（二十二）に駆り立てられた行動と手厳しい。だが、箱根に着いた純一が見たのは、坂井夫人が別の男といる姿だった。それに対し「鋭い不平」と「思ひ知らせようと云う」（二十四）感情を抱くのだが、明くる日、純一はそれが「自己を愛する心が傷つけられた不平に過ぎ」ず、何らの「熱情をも、あの奥さんに捧げてはゐない」自分に「不平」を言う「権利」はないと漸く悟り、「寂しさ」を感ずるのだが、「この寂しさの中から作品が生れないにも限らない」（二十四）と、物語を書くという方向へ歩みを進めようとするのである。むろん純一はいまだ何の「犠牲」も払ってはいないのだが、箱根での出来事は、「積極的新人」たる事に向けた「自己」を相対化する視点を獲得させたと言えるだろう。

注

（1）吉見俊哉『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』（人文書院、平成一五・五）

（2）高橋義孝『森鷗外　文芸学試論』（雄山閣、昭和二一・一〇）

（3）『鑑賞日本現代文学①　森鷗外』（角川書店、昭和五六・八）

（4）野村幸一郎『森鷗外の日本近代』（白地社、平成七・三）

（5）『近代文学注釈と批評』誌上の「森鷗外「青年」注釈」（庄司達也「第一章」、水沢不二夫「第二章」、小川康子「第三・四章」、水沢不二夫「第五章」、山本康治「第六章」、平成六・一～平成一二・一）のような試みもある。また、生方智子「表象する〈青年〉たち―『三四郎』『青年』」（『日本近代文学』

平成一四・一〇）は、同時代の〈青年〉に共有されていた「「無意識」という領域に到達しよう」とする「〈表象への欲望〉」を析出している。

(6) 紅野謙介『投機としての文学　活字・懸賞・メディア』（新曜社、平成一五・三）

(7) 日本勧業銀行は、明治二九年の日本勧業銀行法にもとづいて設立された特殊銀行だが、この特殊銀行の設立という事が、日清戦争後の戦後経営における一つの柱であったのである。また、日露戦間期（明治三七―三八）には、戦費調達のために多額の公債が発行されたが、明治三七年の貯蓄債券法の可決も、そうした戦費調達という意味合いが大きかったといえる。

(8) 郁文社編輯所編『社会新辞典』（郁文社、明治三九・一一）

(9) 『小国民』（石井研堂主宰、上笙一郎・上田信道編、学齢館［明治二六年に小国民発行所に変更］、明治二二～二八）は、小学校低学年向きに編まれた児童雑誌で、歴史や地理、理科、修身読み物、子どもたちの投稿文から編成されており、石井自らも筆を執った。

(10) 石井研堂『明治事物起源』（橋南堂、明治三八・一）

(11) 湯本豪一『図説　明治事物起源』（柏書房株式会社、平成八・一一）

(12) 一般的に男子普通選挙法と呼ばれる改正衆議院議員選挙法が公布されるのは、大正一四年五月五日の事である。これにより財産制限は撤廃され、有権者数は三〇〇万余から一二四〇万へと、およそ四倍に増えた。いわば男性の四分の三にあたる人々が「低所得者」として選挙を通じた政治参加という事から抽象的・構造的に排除されていた。

(13) ジャン・ボードリヤール『象徴〈交換〉と死』（今村仁司・塚原史訳、筑摩書房、昭和五七・一〇）

(14) 「名刺製造業」が安定した頃、「文学」の市場も大正一二年の関東大震災直後に急激に縮小する。この市場の縮小打破の目論見の結果として生じるのが「円本ブーム」であり、山本芳明はこの「円本ブーム」が「文学も大衆によって消費される商品であるという事実と直面」させる結果となったと指摘する（『文学者はつくられる』ひつじ書房、平成一二・十二）。しかし、「文学」の市場は現在に至るまで小幅な縮小と拡大を繰り返しているのであって、むしろ、この時期に於いて「文学」は、制度としても産業としても安定したといえるのではないだろうか。そしてその安定は、「文学」が「商品」という〈生産〉物ではなく、商品性を有した〈複製（＝再生産）品〉であった事に起因するのではないだろうか。

(15) 『三四郎』に書き込まれた「名刺」については、小森陽一による「第三講　漱石の女性像」『漱石を読む』（柄谷行人・小池清治・小森陽一・芳賀徹・亀井俊介、岩波書店、平成六・七）や「「帝国」というネットワーク」『文学の方法』（川本皓嗣・小林康夫編、東京大学出版会、平成八・四）に言及がある。そこで小森は、三四郎に「名刺」を差し出す里見美禰子に「自ら社会的な流通に身を投げ出そうとしている「新

しい女」（『文学の方法』）の姿を見出し、「私的で親密な関係とは別な公的なニュアンスが、活字印刷された名前には、はりつく事にな」（『漱石を読む』）るとしている。

(16) この「忘年会」に際しても、「純一は旧主人の高縄の邸へ名刺丈は出して置いた」（十六）という。

(17) 大和灰殻編『西洋土産ハイカラー珍談』（文昌堂書店、明治三六年一〇）。引用は、『近代庶民生活誌　第五巻』（南博他編、三一書房、昭和六〇・六）より行った。

(18) ソースティン・ヴェブレンは『有閑階級の理論　制度の進化に関する経済学的研究』（高哲男訳、ちくま学芸文庫、平成一〇・三）に於いて、ステータス表示機としての諸物を消費する行動を「顕示的消費」とよんだが、純一のこうした消費行動はまさにそれにあたるものである。

(19) 小森陽一『〈ゆらぎ〉の日本文学』（日本放送出版協会、平成一〇・九）

(20) 須田喜代次「鷗外における〝新人〟の問題――「青年」を中心にして」（『言語と文芸』昭和五〇・一〇）

(21) 松村友視は、大村の「利他的個人主義」について、「近代個人主義とは明らかに異なる個人主義であるそれは、完全に主体的な自由意志でありながら、しかも他を利するものとして発動する。大村の議論は、個人主義を動かし難い歴史的必然とする前提に立ちつつ、近代という時代に根ざした利他的倫理の可能性のひとつの到達点として提示されたものといってよい。」（「利他」という思想――鷗外文学におけるSeeleのゆくえ」『文学』平成二五・一）と整理し、そこには「個人主義」「利他的倫理」の「いずれか一方を一義的に選択しないことを選択する明確な意志」が駆動していたとする。

付記

言説の引用に際しては一部を除いて、原文のルビ・圏点等は省略し、旧字体は新字体に改めた。森鷗外「青年」の引用に際しては、『鷗外全集　第六巻』（岩波書店、昭和四七・四）を参照した。

（くろだ　しゅんたろう・本学教員）